

弥生画に挑む若者たち

△一番小さい穀物の貼り付けに取りかかる澤田記成会長。1日わずか2センチしか進まない根気のいる作業だが、丹念に一粒ずつ貼っていた。



△弥生時代に多くの穀物の種子が中国より朝鮮を経て日本に入って来たといわれ、弥生画の名称がそこから生まれました。1782年～1788年の天明の大飢饉では津軽地方で大凶作に見舞われ食料不足で多くの餓死者が出ました。思いあまたの村人たちは、残り少ない種をみんなで持ち寄り餅を使って板に貼り付けて神様に五穀豊穣を祈願したところ、その秋なんと大豊作になり、それ以来毎年元旦には必ずこの祭事が行われ、いつしか種子で絵を作るようになっていったそうです。(弥生会資料より)

14人といつても会員は会社員がほとんどで、仕事の都合で全員が一緒に作業することはまずありません。集まつても日替わりで毎日5、6人くらいでした。奉納の日まで2週間を切つたころ、作業が遅れ、連日深夜まで貼り付けが行われていました。しかしやはりそこは若者です。体力があります。強靭な頑

実は今年、元町弥生会は若い世代に弥生画を託したいということで新旧交代の時期を迎えていました。長年携わってきた会員が会から去り、会長をはじめ会員全員が経験の浅い若者たちになり、人数も昨年の半数の14人と不安いっぱいのスタートとなりました。

今年もまた五穀豊穣を願い、鶴田八幡宮に町伝統の弥生画が奉納されました。この弥生画を毎年制作するのは「元町弥生会」(澤田記成会長)の皆さんで、制作には、9月の下絵書きから穀物の貼り付け、そして奉納作業まで合わせると約3か月という長い時間、そして何より小さな穀物を一粒ずつ貼り合せていくという膨大な手間が掛かっています。

新会長の澤田記成さんは「今年は先輩方がいなくてとても不安でした。でもメンバーが頑張ってくれたのでなんとか完成することができました。今年の弥生画は、辰年ということで、白上姫・龍神物語にしました。昨年は大地震が起きて大変な年になりましたが、今年は平穡無事で豊作になりますよう会員全員祈りながら制作しました。ぜひ皆さんご覧になつてください」と述べ、一つの仕事を終え、ひと回り大きくなつた新生元町弥生会の姿がそこにありました。



弥生画に挑む若者たち



常設展示コーナー完成

鶴の里あるじゃの大豆・米加工施設の西側に、町の2つの弥生画(元町弥生会と山道弥生画保存会)を常設展示するコーナーが完成しました。今まであるじゃ館内だけでの展示でしたが、コーナーの完成により、多くの方が鶴田町伝統の弥生画をいつでもご覧になることができます。